

令和5（2023）年度 資源評価調査報告書（新規拡大種）

種名	クロアワビ	対象水域	日本海
都道府県名	秋田県、山形県、新潟県、富山県、石川県、福井県、京都府、兵庫県、鳥取県、島根県	担当機関名	水産研究・教育機構 水産技術研究所 沿岸生態システム部、水産研究・教育機構 水産資源研究所 底魚資源部、秋田県水産振興センター、山形県水産研究所、新潟県水産海洋研究所、富山県農林水産総合技術センター 水産研究所、石川県水産総合センター、福井県水産試験場、京都府立農林水産技術センター 海洋センター、兵庫県立農林水産技術総合センター 水産技術センター、鳥取県水産試験場、鳥取県栽培漁業センター、島根県栽培漁業センター、全国豊かな海づくり推進協会

1. 調査の概要

秋田県から島根県の各府県調べの2020～2022年月別漁法別漁獲量により近年の漁獲状況を把握した*1。各府県調べの府県別漁獲量は京都府、島根県、並びに鳥取県の赤碕と御来屋地区はクロアワビが区別されているが、他県はあわび類の漁獲量である。

また、農林水産省の漁業・養殖業生産統計年報（以下、農林統計）による1965年以降の府県別あわび類漁獲量を集計し、漁獲動向を推察した*2。

*1 石川県は主要10港のみである。

*2 農林統計値では、兵庫県は日本海西区の値である。

2. 漁業の概要

対象海域では本種だけでなく、メガアワビ、マダカアワビ、北部ではエゾアワビも同時に漁獲するため、一括してあわび類として漁獲量が計上されることが多い。各府県調べの漁獲情報に基づき、各府県の2020～2022年のあわび類漁獲量を図1に示した。2022年は島根県（全域の漁獲量に占める割合：18.9%（以下同様））、新潟県（17.4%）、福井県（17.2%）の順、2021年は福井県（18.2%）、島根県（17.5%）、新潟県（17.4%）の順、2020年は福井県（19.8%）、新潟県（17.1%）、島根県（17.0%）の順に多かった。これら3県の漁獲量で対象水域全体の50%以上を占めていた。一方で富山県の漁獲量は2020～2022年を通して一番少なく、全域の1.0～1.1%を占めていた。次に、府県ごとの月別漁法別漁獲量を図2および図3に示した。多くの府県では夏季（6～9月）に漁獲量が多かった。漁法に関しては、採貝（一部の県では採貝はその他に含まれている）が多かった。

種ごとの情報としては京都府、島根県、鳥取県で利用可能である。京都府では2019～2022年の日別漁獲量が集計可能となっている。2019年まではクロアワビとメガイアワビは区分されていないが、従前よりクロアワビの漁獲量は多く、あわび類漁獲量に占める割合は毎年9割程度である。島根県の2020～2022年のあわび類の種組成を図4に示した。島根県のクロアワビの割合が2020年では全体の8割であり、近年その割合が減少傾向にあり、2022年では7割であった。島根県の2020～2022年のクロアワビ月別漁法別漁獲量を図5に示し、1～4月、6～8月および12月に漁獲が多かった。鳥取県の2022年のクロアワビの漁獲量は3～5月および10～11月に多かった。漁法に関しては、京都府、鳥取県、島根県ともに採貝が多かった。

3. 生物学的特性

- (1) 分布・回遊：日本海側の北海道の松前小島以南、太平洋側の茨城県以南、九州まで分布する（猪野 1966）が、青森県から山形県、茨城県、福島県はエゾ・クロアワビ中間地域（遷移地域）とされる（関野・原 2015）。同所的に生息するメガイアワビ、マダカアワビに比べると最も浅場（主に 10 m 以浅）に生息する（猪野 1966）。受精後 1 日以内にふ化し、浮遊期間は 4～8 日である。人工種苗の放流結果から、拡散範囲は餌料海藻が不足しない場所ではほぼ 50 m 以内とされる（青森県ほか 1990）。
- (2) 年齢・成長：殻の表面に年 1 本形成される輪紋を読み取ることで年齢査定が可能とされる（山崎・鴨志田 2018）。成長は 13～20℃でよく（井上 1987）、餌料海藻の種類・量の影響を受ける（青森県ほか 1990）。暖流系あわび類は 1 年で 2～4 cm、2 年で 3～7 cm、3 年で 5～10 cm、4 年で 7～12 cm に成長するとされる（山崎・鴨志田 2018）。最大で 20 cm を超え、寿命は 15～20 年程度とされる（井上 1987、清水・田中 2001）。
- (3) 成熟・産卵：生殖巣肥厚の変化、組織学的観察、浮遊幼生の出現等により産卵期は 10 月～翌年 1 月で、開始時期は水温が 20℃前後の頃であり、クロアワビはマダカアワビ、メガイアワビよりも半月程度早いとされる（青森県ほか 1990）。2 歳の殻長 5 cm 前後で成熟する個体が見られ、3 歳でほぼすべてが成熟する（小島・湯浅 1993）。孕卵数と殻長の関係について千葉県では以下の推定式が得られており、

$$\text{卵数 (粒)} = 175240 \times 10^{-(8.0014) \times (\text{殻長 mm})^{4.4339}}$$
 殻長 10 cm で 130 万個、12 cm で 289 万個、14 cm で 573 万個とされる（石田・田中 1983）。長崎県における殻長別の孕卵数は 10 cm で約 100 万粒、12 cm で約 200 万粒、14 cm で約 500 万粒とされる（長崎県総合水産試験場 2006）。
- (4) 被捕食関係：着底した稚貝は殻長 10 mm 前後までは付着珪藻など微細藻類や海藻の幼芽を摂餌し、成長に伴い小型海藻および大型海藻に主餌料が変わる（青森県ほか 1990）。大型褐藻類ではアラメ・カジメ類、ヤツマタモクをはじめとするホンダワラ類が主な餌料とされる（井上 1987）。捕食者としては、マダコ、ヤツデヒトデ、イトマキヒトデなどのヒトデ類、イシガニ、ヤドカリ類などの甲殻類、クサフグ、カワハギなどの魚類、ヒメヨウラクなどの肉食性巻貝があげられる（青森県ほか

1990)。

4. 資源状態

農林統計に基づく青森県～島根県の1965年以降の府県別あわび類漁獲量を図6および表1に示した。ただし、農林統計では、あわび類として集計されているものの、クロアワビの漁獲量としては集計されていない。また、資源量指標値とするには主要漁業である採貝、刺網の適切な努力量を検討し、それを考慮することが不可欠であり、現在の情報からは対象水域全体の水準・動向は判断できない。従って、以下では日本海におけるあわび類の漁獲動向のみを述べるに留める。1965年以降では、1984年(331トン)をピークに、中長期的には減少傾向にある。1992年から200トンを下回るようになった。2017年、2019～2021年は100トン以下となり、2019年に過去最低の74トンとなり、その後は低い水準である。また、各府県調べの2020～2022年のあわび類の漁獲量の近年の傾向として、2020年は64トン、2021年は72トンとわずかに増加したが、2022年は56トンと減少に転じた。京都府と兵庫県のように増加傾向の府県がある一方で、秋田県、山形県、福井県、および鳥取県のように減少傾向の県もあり、その傾向に差異がある。

また、クロアワビについて、島根県では2020～2022年の漁獲量に大きな変動がみられなかった。

なお、京都府では1990年以降の漁獲状況から2022年の資源水準は中位、2019年以降の漁業者個人別のクロアワビの日別漁獲量(京都府漁業協同組合資料)を基に得られた2019～2022年のCPUE(漁獲量(kg)/人日)より、動向は横ばいとされた。鳥取県では漁獲量の推移から2022年の水準・動向は中位・減少とされている(後述)。

5. その他

各府県の漁業調整規則において多くの府県では漁獲サイズの制限が行われ、一部の県では禁漁期が定められている。また、漁協、支所単位等で禁漁期、漁獲サイズの引き上げ、漁法の制限が行われている。

福井県から島根県では少なくとも2004年以降、種苗放流が行われており、2021年には5府県で合計65万個が放流されている。

6. 引用文献

青森県・岩手県・秋田県・神奈川県・福岡県(1990)「アワビ種苗放流マニュアル」. 秋田県水産振興センター, 男鹿, 118 pp.

猪野 峻(1966)「アワビとその増養殖」. 水産増養殖叢書, 11, 日本水産資源保護協会, 東京, 103 pp.

井上正昭(1987)アワビの漁業管理. 「国内における資源評価及び管理手段に関するレビュー」, 日本水産資源保護協会, 東京, 120-165.

石田 修・田中種雄(1983)千葉県太海、天面地先海域のクロアワビ及びメカイアワビの産卵期. 千葉県水産試験場研究報告, 41, 11-22.

- 小島 博・湯浅明彦 (1993) 牟岐町地先におけるマダカアワビ・メガイアワビの生態と海士漁業. 平成3年度徳島県水産試験場事業報告書. 徳島県水産試験場, 54-59.
- 長崎県総合水産試験場 (2006) 「アワビ放流の手引き」. 長崎県総合水産試験場, 長崎, 28pp.
- 関野正志・原 素之 (2015) アワビ資源管理・保全における DNA マーカーの活用. 水産育種, 44, 25-29.
- 清水利厚・田中種雄 (2001) 千葉県におけるアワビの最大形. 千葉県水産試験場研究報告, 57, 273-275.
- 山崎 誠・鴨志田正晃 (編) (2018) 「あわび類の生態に基づく資源管理・増殖」. 国立研究開発法人 水産研究・教育機構 増養殖研究所, 南伊勢, 104pp.

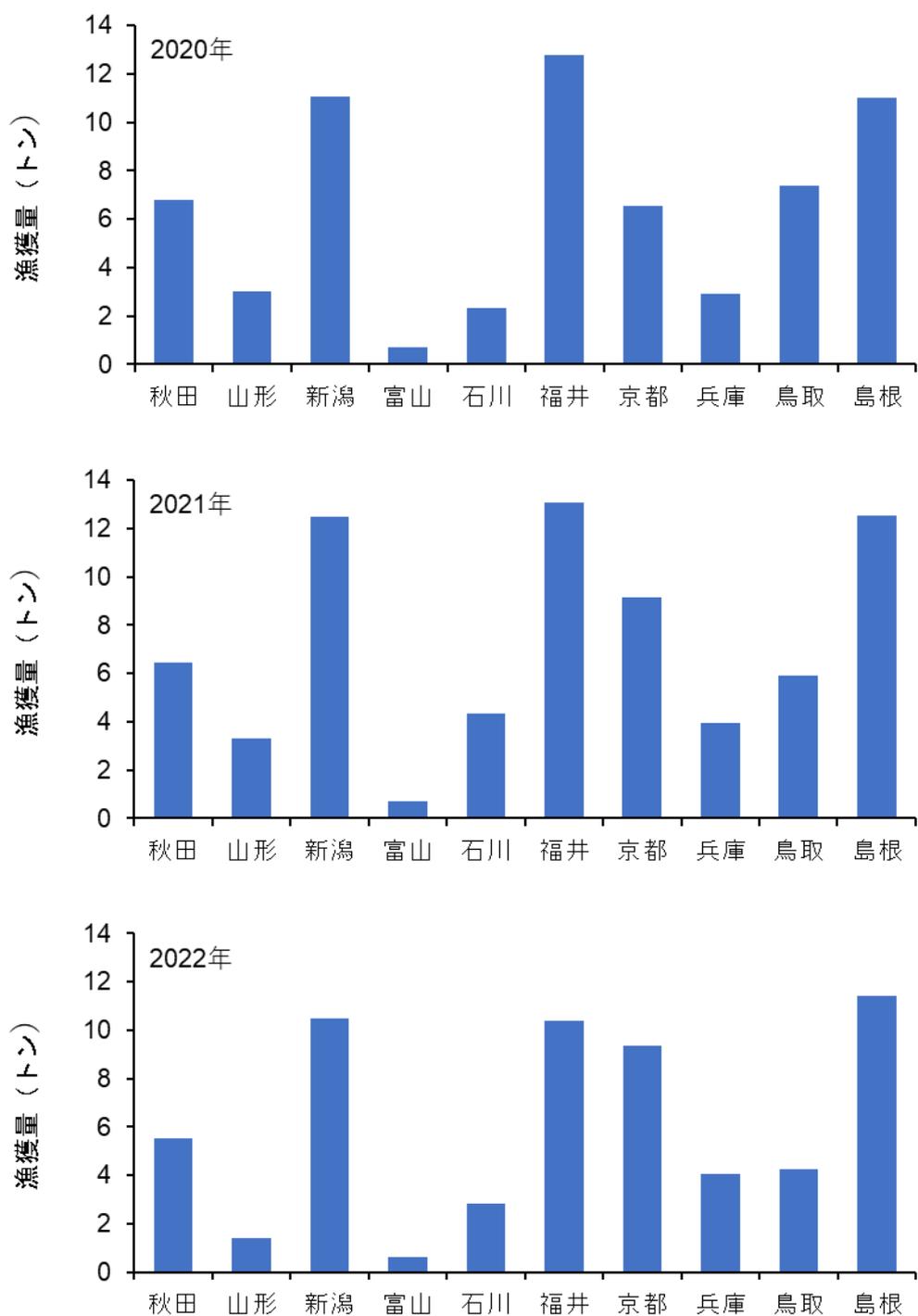


図1. 日本海におけるあわび類の府県別漁獲量（2020～2022年；各府県調べ）

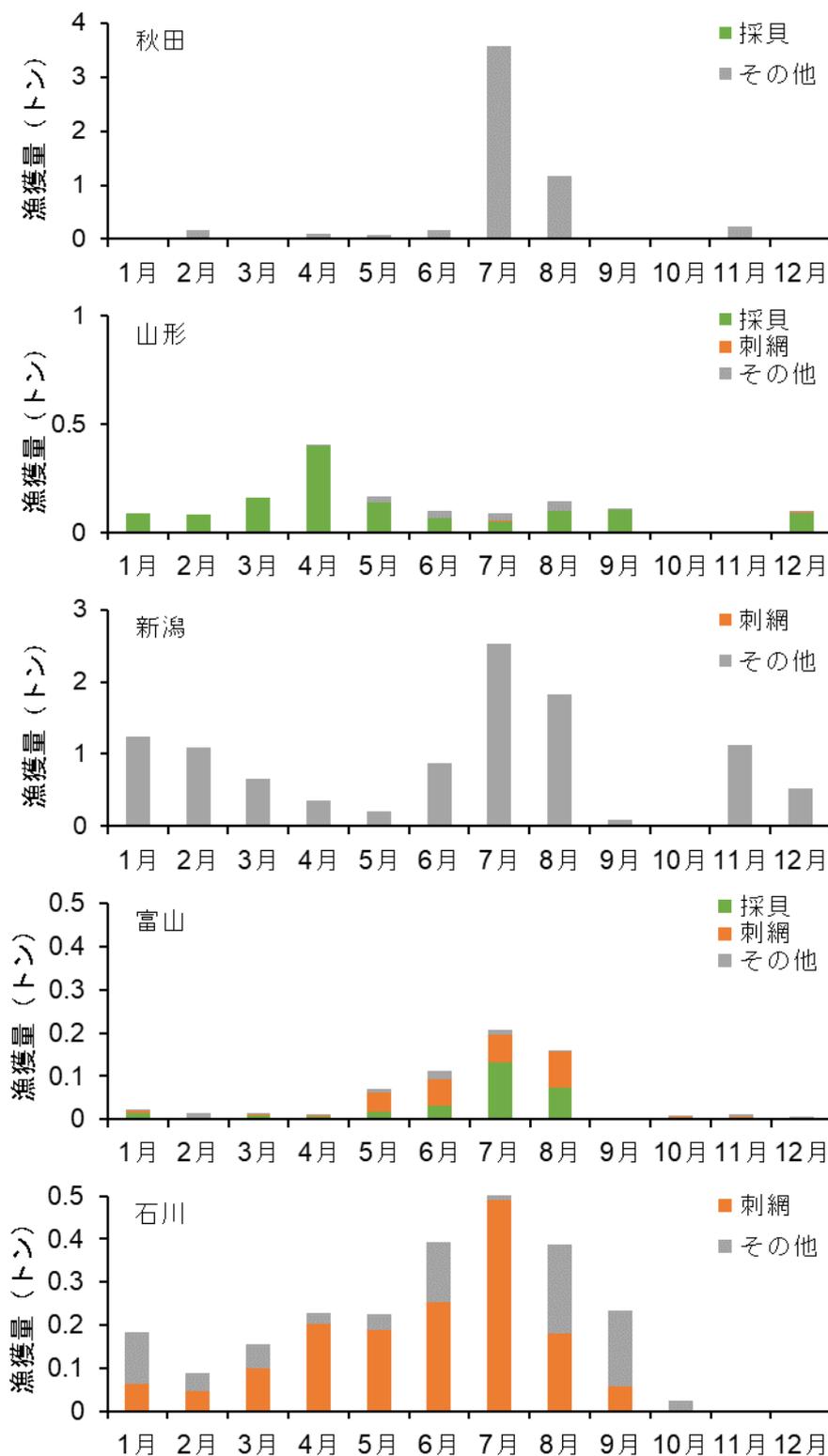


図2. 日本海北中部におけるあわび類の県別の月別漁法別漁獲量（2022年）

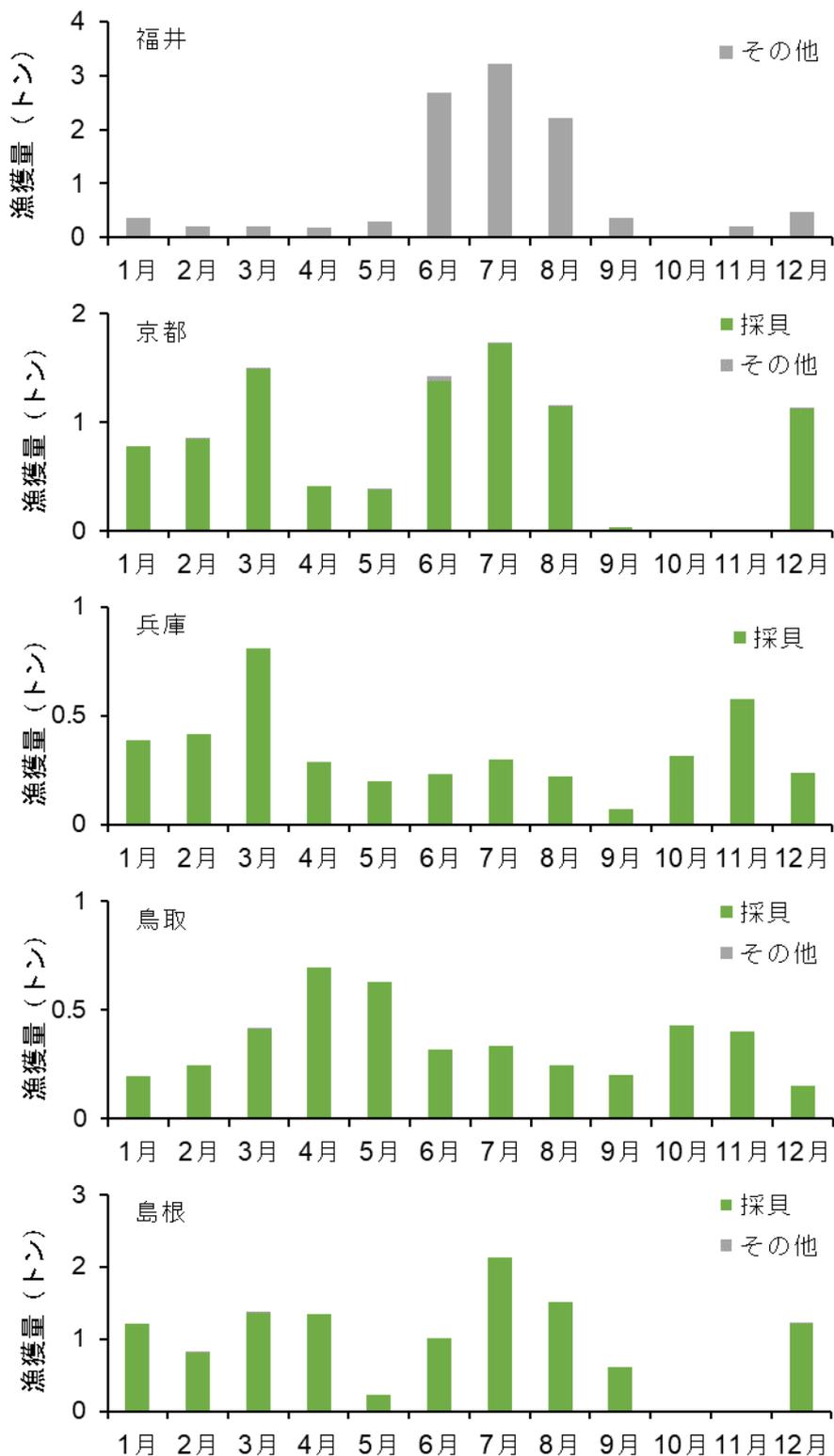


図3. 日本海西部におけるあわび類の府県別月別漁法別漁獲量（2022年）
 福井県のその他には採貝および刺網が含まれている。兵庫県はほとんどが採貝藻漁業による漁獲であるため、採貝としている。

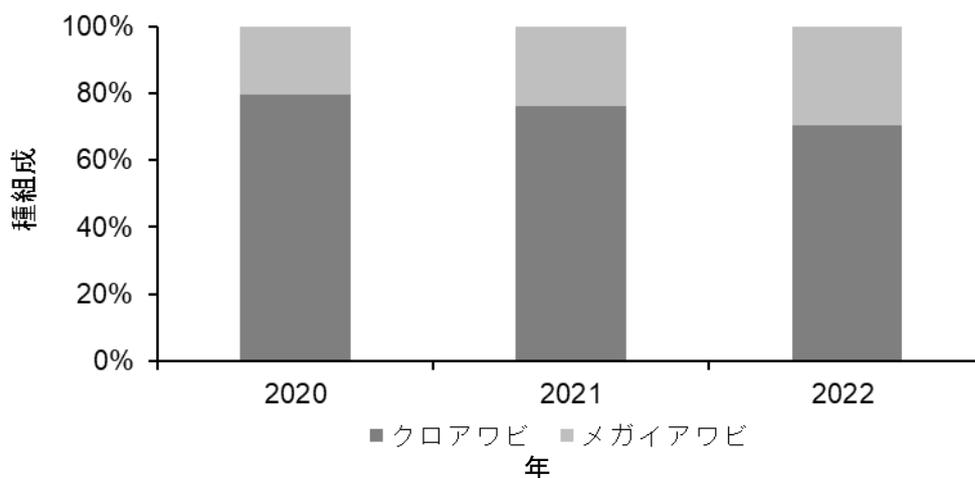


図4. 島根県のクロアワビ、メガイアワビの種組成 (2020～2022年)
 メガイアワビに類似種マダカアワビの混じりの可能性あり。

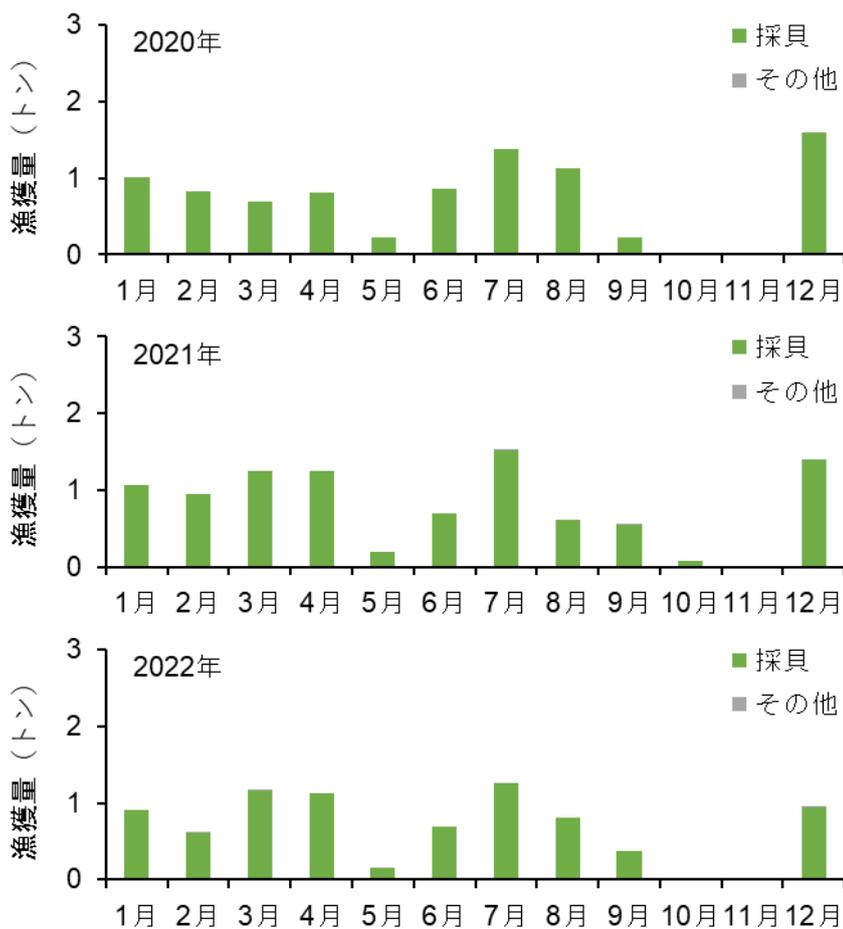


図5. 島根県のクロアワビの月別漁法別漁獲量 (2020～2022年)

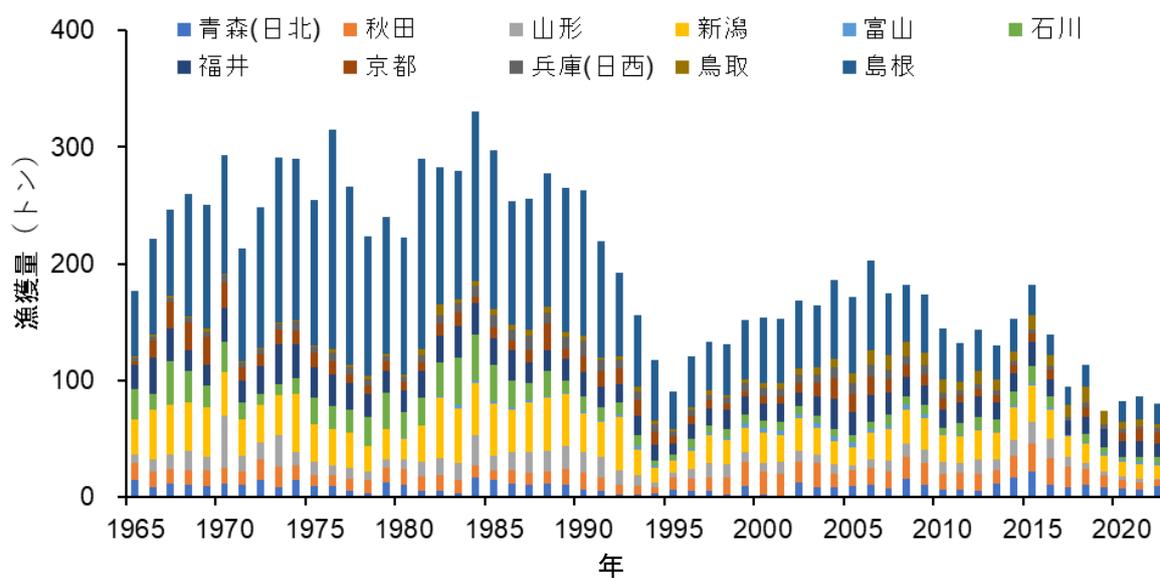


図 6. 日本海におけるあわび類の府県別漁獲量の年変化（農林統計 1965～2022 年）
 青森県は日本海北区、兵庫県は日本海西区の値である。2022 年は暫定値である。

表 1. 日本海各府県におけるあわび類の漁獲量（トン）

年	青森	秋田	山形	新潟	富山	石川	福井	京都	兵庫	鳥取	島根	計
1965	15	14	8	30	0	26	21	3	3	1	56	177
1966	9	13	10	43	0	14	31	14	3	3	82	222
1967	12	12	13	42	0	38	28	23	3	2	73	246
1968	11	12	17	41	-	27	18	24	4	1	105	260
1969	10	13	12	42	-	19	18	23	5	3	106	251
1970	12	13	45	37	-	26	29	22	6	1	102	293
1971	11	11	14	31	-	14	19	11	5	1	96	213
1972	15	18	14	32	-	10	23	11	4	1	121	249
1973	9	17	27	35	-	9	34	13	5	1	141	291
1974	15	12	12	50	-	13	29	12	8	1	138	290
1975	10	9	11	33	-	22	26	13	5	1	125	255
1976	10	9	8	31	-	20	27	12	7	3	188	315
1977	6	10	9	30	-	20	23	7	6	2	153	266
1978	3	12	7	22	-	25	20	7	5	3	120	224
1979	13	12	7	26	-	32	18	9	4	2	117	240
1980	11	13	8	18	1	22	19	7	4	2	118	223
1981	6	12	12	32	0	23	23	8	6	5	163	290
1982	5	14	15	51	2	29	22	11	7	9	118	283
1983	3	12	14	47	3	41	27	11	8	4	110	280
1984	17	10	26	45	2	39	27	6	9	4	146	331
1985	15	8	13	44	2	31	23	10	10	5	136	297
1986	12	11	16	36	2	23	26	8	10	4	106	254
1987	11	10	18	42	2	15	18	10	12	6	112	256
1988	12	10	18	45	2	21	18	23	9	5	115	278
1989	11	13	20	45	1	10	19	8	10	5	123	265
1990	7	14	18	33	2	13	20	14	13	4	125	263
1991	5	12	18	30	1	11	18	13	10	2	99	219
1992	2	9	12	46	2	10	16	13	8	3	71	192
1993	2	8	9	22	3	9	17	13	8	4	61	156
1994	3	6	4	12	2	4	14	11	7	3	52	118
1995	7	10	4	10	1	5	9	6	4	2	33	91
1996	5	11	8	16	2	8	13	7	5	2	44	121
1997	5	12	12	24	2	7	14	7	5	4	41	133
1998	2	15	11	21	2	7	17	5	5	3	43	131
1999	10	20	9	21	4	7	15	5	7	3	51	152
2000	2	20	7	26	4	7	14	6	8	4	56	154
2001	1	19	10	23	4	8	15	6	7	5	55	153
2002	13	17	10	28	3	7	12	8	7	5	59	169
2003	9	20	8	22	5	6	17	11	7	6	53	164
2004	9	11	8	20	4	6	26	18	9	8	67	186
2005	10	13	4	16	4	6	20	16	9	8	66	172
2006	11	14	8	22	3	7	23	15	10	13	77	203
2007	8	14	9	27	4	9	19	11	8	13	53	175
2008	16	19	11	29	4	8	16	10	8	12	49	182
2009	11	18	12	27	3	8	17	9	8	11	50	174
2010	7	13	10	23	1	5	16	9	6	11	44	145
2011	7	14	8	23	1	11	17	7	4	7	33	132
2012	6	14	12	25	1	11	18	6	4	11	36	144
2013	12	11	9	23	1	11	14	7	4	9	29	130
2014	17	19	13	28	2	12	15	7	4	8	28	153
2015	22	24	19	31	2	14	21	8	3	12	26	182
2016	11	23	16	25	2	10	14	8	3	10	17	139
2017	9	17	9	17	1	-	13	-	3	10	16	95
2018	11	13	5	17	1	7	15	8	4	14	19	114
2019	9	10	3	14	2	5	15	-	5	11	-	74
2020	8	7	3	12	2	3	13	7	3	7	17	82
2021	7	6	3	12	2	5	13	10	3	6	19	86
2022	10	5	1	11	2	6	11	9	4	4	17	80

※青森県は日本海北区、兵庫県は日本海西区の値。2022年は暫定値である。

令和 5（2023）年度 資源評価調査報告書（新規拡大種）

種名	クロアワビ	対象水域	京都府海域
都道府県名	京都府	担当機関名	京都府農林水産技術センター 海洋センター

1. 調査の概要

京都府におけるあわび類水揚量、漁獲努力量を集計し、漁獲量および資源動向の評価を試みた。

2. 漁業の概要

- (1) 漁獲量の推移：1990～2022年に京都府沿岸で漁獲されたあわび類の漁獲量は3.5～16.5トンの範囲であった（京都府漁業協同組合資料）。1990年には10トンを超えていた漁獲量は、1999年には4トンを下回るまでに減少した。その後急速に増加して2004年には16トンを上回った。その後再び減少傾向に転じ、2011年には5トンを下回った。2012年以降は緩やかな増加傾向を示している（図1）。なお、2019年まではクロアワビとメガイアワビは区分されていないが、従前よりメガイアワビの漁獲量は少なく、あわび類漁獲量に占める割合は毎年10%程度と安定的かつ小さいことから、今年度の資源評価についてはあわび類漁獲量をクロアワビ漁獲量として取り扱うこととした。
- (2) 府内の漁法：京都府においては、クロアワビを含むあわび類は水視漁業（船上から、のぞき眼鏡とカギを用いてアワビをひっかけて漁獲する漁業）で漁獲されてきたが、近年では潜水漁業での漁獲割合が増加している。

3. 生物学的特性

- (1) 分布：茨城県以南の太平洋沿岸および日本海全域から九州（奥谷 2017）とされる。京都府沿岸においては、阿蘇海および久美浜湾の湾奥部を除く沿岸の岩礁帯、転石帯に生息している。
- (2) 年齢・成長：京都府沿岸の伊根町蒲入地先では、1歳で19 mm、2歳で44 mm、3歳で66 mm、4歳で85 mm、5歳で102 mm、6歳で118 mm、7歳で131 mm、8歳では143 mmに（山本ほか 2010）、宮津市養老地先では、1歳で19 mm、2歳で50 mm、3歳で76 mm、4歳で98 mm、5歳で116 mm、6歳で131 mm、7歳で143 mm、8歳では154 mmと推定されている（久門ほか 2011）。
- (3) 成熟・産卵：京都府沿岸における本種の産卵期は、10～12月、盛期は11月とされている（久門ほか 2012）。なお、京都府沿岸の主な産卵期にあたる9～11月までは京都府漁業調整規則によって採捕が禁止されている。京都府沿岸域における年齢と成熟の関係は調べられていないが、クロアワビの生物学的最小形は京都府と比較的緯度の近い淡路島では雌6.8 cm、雄6.0 cm（兵庫県 1980）とされる。

- (4) 被捕食関係：京都府沿岸に生息する本種の詳細な被捕食関係は不明だが、清本・鬼塚 (2018) がアワビの競合生物（ムラサキウニ、ガンガゼ類）や捕食生物（甲殻類、タコ類、棘皮動物（ヒトデ類））としている生物は普通にみられる。

4. 資源状態

- (1) 資源水準：1990～2022年までの漁獲量は図1に示したとおりである。漁獲量にかかるバイアスを低減させるために各年の漁獲量を各年の出荷戸数（≒経営体数）で除した数値（漁獲量 (kg) /戸）の推移を図2に示した。これらの値を、第1四分位および第3四分位により3分割し、第1四分位未満を低位、第1四分位以上、第3四分位未満を中位、第3四分位以上を高位の資源水準とした。したがって、2022年の京都府のクロアワビの資源水準は中位であり、2007年以降は2011年および2020年を除く全ての年で中位であったと判断した。
- (2) 資源動向：2019年以降は漁業者個人別のクロアワビおよびメガイアワビそれぞれの日別漁獲量（京都府漁業協同組合資料）が入手可能となったことから、このデータを用いて2019～2022年の期間の資源動向を判断した。CPUE（漁獲量 (kg) / (人・日)）の推移をみると、ほぼ一定であった（図3）ことから、近年の資源動向は横ばいと判断した。

5. その他

京都府漁業調整規則で定められている殻長制限は10 cmであるが、一部海域では漁業者が自主的に殻長制限を引き上げ、11 cmや12 cmとしている。クロアワビは殻長が大きくなれば単価が上昇することが知られており（篠原ほか 2018）、最大の漁獲金額は制限殻長を135.3～142.8 mmの範囲にすることで実現される（篠原 2019）としている。殻長制限の引き上げを行った海域では、従来（殻長10 cm制限）よりも合理的な漁獲が行われていると推察される。

6. 引用文献

- 篠原義昭 (2019) 宮津市養老地区潜水漁法におけるクロアワビの資源管理, 京都府農林水産技術センター海洋センター研究報告, **41**, 13-18.
- 篠原義昭・道家章生・西垣友和 (2018) 京都府におけるクロアワビの殻長と単価の関係 (短報) 京都府農林水産技術センター海洋センター研究報告, **40**, 1-19.
- 兵庫県 (1980) 大規模増殖場開発事業調査総合報告書 昭和 54 年度版 (南淡路地区), 1-52
- 清本節夫・鬼塚年弘 (2018) 多種との競合・捕食関係 II-1-2) 暖流系アワビ類, アワビ類の生態に基づく資源管理・増殖, 50-52.
- 久門道彦・山本圭吾・道家章生 (2011) 京都府宮津地先におけるクロアワビの成長 (短報) 京都農技セ海洋セ研報, **33**, 25-28.
- 久門道彦・山本圭吾・道家章生 (2012) 京都府宮津市栗田地先におけるクロアワビの産卵期. 京都府農林水産技術センター海洋センター研究報告, **34**, 1-4.
- 奥谷喬司 (2017) 日本近海産貝類図鑑 (第二版) 解説」, 774, 東海大学出版部.
- 山本圭吾・西垣友和・遠藤 光・竹野功壘 (2010) 京都府蒲入地先におけるクロアワビの

成長. 京都農技セ海洋セ研報, 32, 7-11.

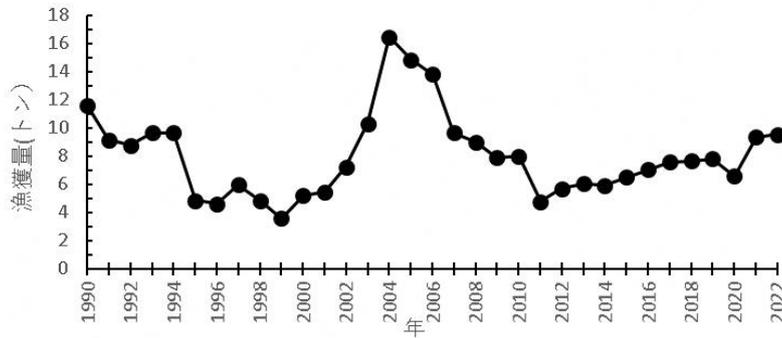


図1. 京都府のあわび類漁獲量の推移 (1990～2022年) 数値は府漁協まとめ。

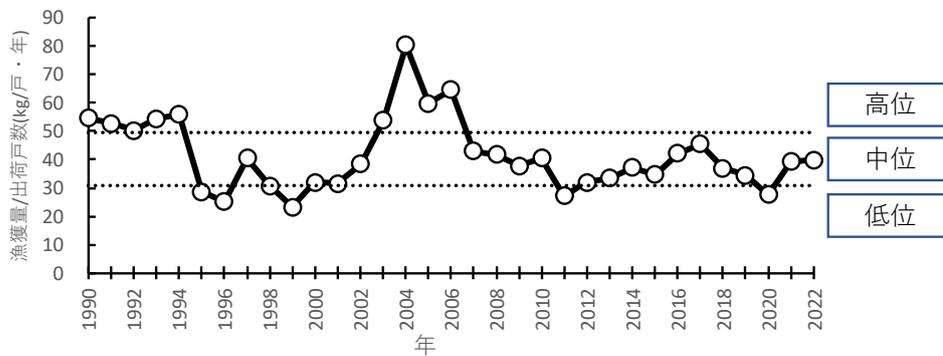


図2. あわび類漁獲量/出荷戸数 (kg/戸) の推移 (1990～2022年)
数値は府漁協まとめ (点線は、集計期間における第1四分位および第3四分位を表し、それぞれを中位/低位、高位/中位の境界とした)。

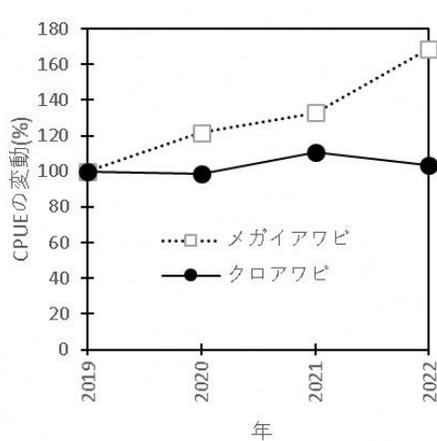


図3. クロアワビとメガイアワビのCPUEの変動 (2019年を基準年(100%)とした)
府内漁業者個人の京都府漁協市場への出荷日を出漁日とみなし、市場に出荷した重量の合計を出荷日数で除した数値をCPUE (kg/(人・日))とした。数値は府漁協伝票データを京都府で再集計したもの。

令和 5（2023）年度 資源評価調査報告書（新規拡大種）

種名	クロアワビ	対象水域	日本海のうち鳥取県沿岸
都道府県名	鳥取県	担当機関名	鳥取県栽培漁業センター

1. 調査の概要

- (1) 漁獲量集計：沿海漁業協同組合の漁業種類別漁獲量を集計した。
- (2) 市場調査：2022 年に県内各地区で水揚げされたクロアワビの殻長、重量、混獲率を調査。県内 3 海域（東部（東～網代）、中部（福部～泊）、西部（赤碕～境））別のクロアワビの漁獲量を、市場調査で得られた海域別のクロアワビの平均重量（東部 307 g : N=83、中部 267 g : N=692、西部 286 g : N=359）で除して海域別に総漁獲枚数を推定し、殻長組成を求めた。

2. 漁業の概要

- (1) 漁獲量：1980～2000 年頃まで 3～5 トン前後で推移。1990 年代後半から放流方法を船上バラまき放流から潜水放流に切り替えた結果、漁獲量が増加し、2004～2020 年は 7～14 トンで推移。しかし、2018 年以降は減少し、2022 年は 4 トンであった（図 1）。
- (2) 主要漁業：磯見（図 2）。
- (3) 漁期：漁獲量は 3～5 月および 10～11 月に多い（図 2）。
- (4) 漁獲物の殻長組成および混獲率：海域別にみると、県東部 106～164 mm、中部 91～167 mm、西部 103～165 mm の個体が漁獲されており、各海域ともに漁獲主体は 110～130 mm の個体であった（図 3）。また、県全体での混獲率は 33%であった（表 1）。

3. 生物学的特性

- (1) 分布・回遊：県内沿岸域。水深約 5～10 m の転石域、岩礁域に多く生息する。
- (2) 年齢・成長：約 10 年で殻長 20 cm 程に成長する。また、殻長 3 cm の種苗を餌料の豊富な海域と貧弱な海域に放流し、比較したところ、豊富な海域では 1 年後：7.5 cm、2 年後 9.5 cm、3 年後 10.3 cm、4 年後 12 cm に対し、貧弱な海域では 1 年後：5.5 cm、2 年後 7.5 cm、3 年後 8.5 cm、4 年後 9.5 cm と差が生じた（鳥取県 1997）。
- (3) 成熟・産卵：主に 3 歳以上で成熟し、産卵期は 10 月下旬～1 月頃とされていたが（鳥取県 1997）、近年は春先にも成熟個体が確認されている（鳥取県 2023）。
- (4) 被捕食関係：マクサ、アナアオサ、ワカメ等の海藻類を採餌。たこ類、ひとで類、かに類、やどかり類、魚類等に捕食される（鳥取県 1997）。

4. 資源状態

種苗放流数の減少は見られないものの、2022 年の漁獲量は 4 トンで、2018 年の 13 トン

ンから大きく減少している。

過去の漁獲量と比較すると、2022年の漁獲水準・動向は、中位・減少の状態にある（鳥取県 2023）。

5. その他

サイズ制限（県調整規則：殻長 9 cm 以下、各海区漁業権行使規則：殻長 11 cm 未満（東～福部）、同 9 cm 以下（賀露～浜村、米子、境）、同 11 cm 以下（夏泊～泊）、同 10 cm 以下（赤碕～淀江）、自主規制：11 cm 以下（淀江、御来屋、泊、青谷、浜村、酒津、福部）および 11 cm 未満（境、中山、赤碕、網代、田後、浦富、東）並びに 10 cm 以下（賀露）の採捕禁止）、操業時間および時期制限、保護区設定、藻場造成、外敵、ウニ駆除等に取り組んでいる。

6. 引用文献

鳥取県 (1997) 鳥取県の栽培漁業アワビ, 8pp.

鳥取県 (2023) クロアワビ・メガイアワビ. 令和 4 年度版鳥取県海洋環境・水産資源レポート, pp.61.

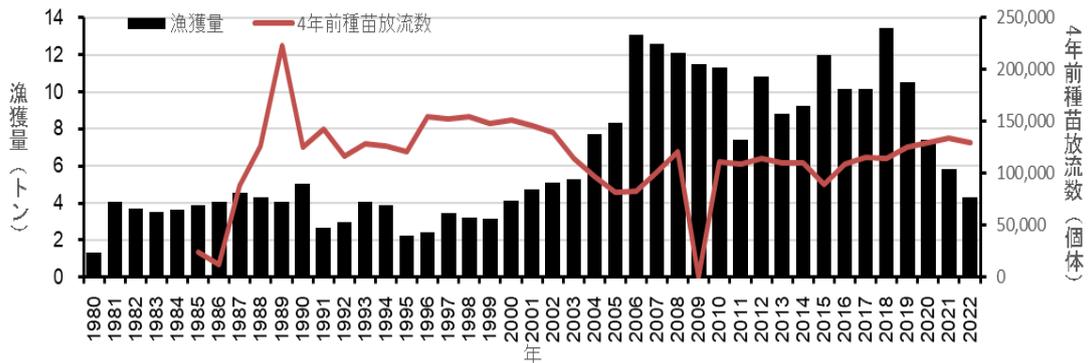


図 1. 鳥取県におけるアワビ漁獲量および種苗放流数の推移 (1980～2022 年)

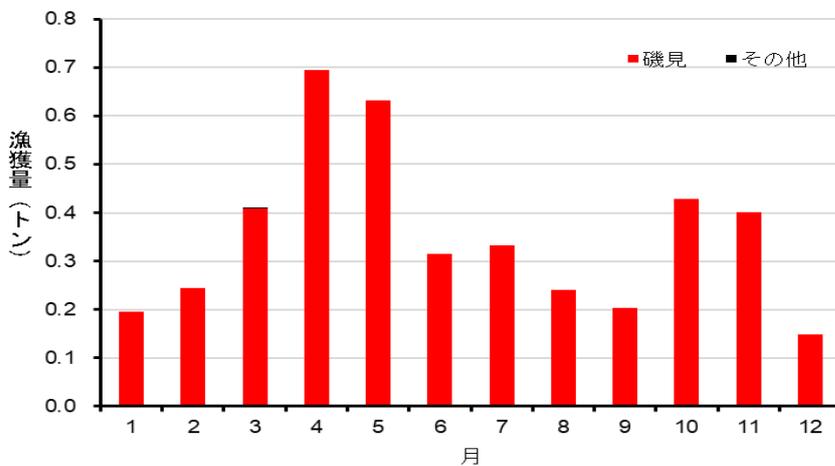


図 2. 鳥取県におけるクロアワビの月別漁法別漁獲量 (2022 年)

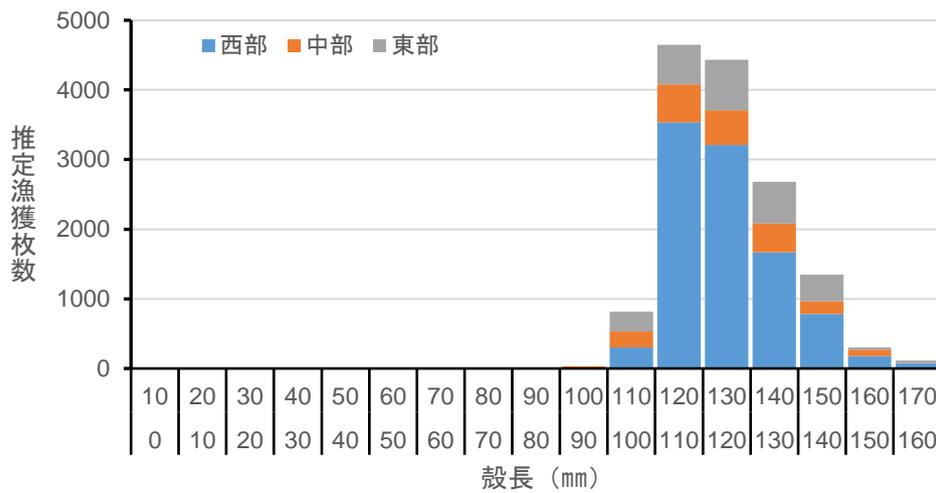


図3. 鳥取県で漁獲されたクロアワビの殻長組成 (2022年)

表1. 鳥取県における放流クロアワビの混獲率 (2022年度)

種	海域区分	地区名	調査個体数 (A)	放流由来 個体数 (B)	混獲率 (%) (B/A × 100)
クロアワビ	東部	東	29	12	41
		浦富	25	7	28
		網代	30	15	50
	中部	福部	19	3	16
		賀露	118	46	39
		酒津	95	30	32
		浜村	194	65	34
		夏泊	104	23	22
		青谷	151	51	34
		泊	89	31	35
	西部	赤碕	57	12	21
		中山	262	94	36
		御来屋	66	16	24
合計			1,239	405	33